



# 映画

## 痛くない死に方

2021年/日本/1時間52分/監督:高橋伴明/原作:長尾和宏『痛くない死に方』『痛い在宅医』(ブックマン社)/出演:柄本佑(河田仁)、奥田瑛二(長野浩平)、宇崎竜童(本多彰)/配給:渋谷プロダクション

自宅で死にたい、過剰な医療を排除して、なるべく痛くないように死にたい。患者と家族が願う、そんな「平穏死」を提唱

## 「痛くない死に方」とは 終末期の在宅医療を見つめて

する、尾崎の町医者・長尾和宏医師の原作本を元に、高橋伴明が脚本・監



©「痛くない死に方」製作委員会

「病を見るのではない、人を見るんだ」と先輩の医師に諭された河田。それをきっかけに在宅医としてのあり方を模索しはじめ

督した作品。終末期在宅医療問題を真正面からとらえる力作だ。

この映画には二人の末期癌患者が登場する。一人目が亡くなったとき、その凄絶な苦しみ方に重苦しさだけが募り、息も詰まるようだが、二人目が登場した途端に一転明るく楽しく、これから来る「死」さえも浮き浮きと迎えられるような気分になる。

一人目の患者を演じた

下元史朗の鬼気迫る演技が素晴らしい、死人の役は体力的に大変だとつくづく感じる。

末期癌患者である父親を病院から自宅に引き取った娘は、自分が父を殺したのではないかと自責の念に駆られ、若い在宅医河田を恨みに思う。平穏死を迎えられるはずだったのに、実際は違ってしまったのだ。河田は激務ゆえに妻に去られ、私生活を犠牲にして患者に

い(591-1301)という電話番号だの、久しぶりに聞いた。さすがは高橋伴明の脚本だ。

本多は川柳をメモ帳に書き綴っている。その川柳がまた諧謔に富んでいて、楽しい。河田医師も本多に影響されて五七五を口にするようになり、すっかり本多夫妻と意気投合する。この川柳には、最後にはろりときせる巧みな仕掛けが施されていて、泣かせる。本多を演じた宇崎竜童が大変いい役をもらって喜々として演じているところも微笑ましい。

本作を見終わってただちに、「リビング・ウィルを書こう」と決意する観客も多いだろう。どう死ぬのかはどう生きるのかを問うこと。笑ったり泣いたりしながら、しみじみとその答えを考えさせるのがこの映画である。

「病を見るのではない、人を見るんだ」と先輩の医師に諭された河田。それをきっかけに在宅医としてのあり方を模索しはじめ

原作者の長尾医師を追ったドキュメンタリー「けったいな町医者」と

ほぼ同時公開。どちらも劇場で見たい。エル・ライブラリー(大阪産業資料館) 館長 谷合佳代子

▼公開日/3月5日(金) ▼上映館/〈大阪〉な ンバパークシネマ 06(6643)3215、 他、〈京都〉京都シネマ 075(353)4723、他、〈兵庫〉神戸 国際松竹 078(230)3580、他 (11字×10行)